

峨眉山月歌 がびさんげつのうた

李白

峨眉山月半輪秋

峨眉山月半輪の月

影入平羌江水流

影は平羌の江水に入りて流る

夜發清溪向三峽

夜清溪を發して三峽に向かう

思君不見下渝州

君を思へども見えず渝州に下る

峨眉山にかかる半輪の秋の月。

その清かな月影は、

平羌地方を流れる長江の水面に映りきらきらと流れている。

私は夜中に清溪を船出して三峡に向かう。

もはや会えない君の面影を胸に、

ひたすら渝州へと下ってゆく。

《峨眉山》 四川省西部にある名山で月の名所でもある。

《半輪》 半月

《平羌江》 別名青衣江といい、峨眉山のふもとを流れ楽山県で岷江に合流する。

《清溪》 岷江沿岸の宿場の名。

《三峡》 長江の三つの峡谷で急流でけわしい。上流から瞿塘峡、巫峡、西陵峡。

《渝州》 四川省重慶市。

古の中国の知識人は各地を広くめぐり歩くことが一般的だったといわれます。これは旅行そのものが目的ではなく、様々なことを経験して見聞を広め、また各地の名士たちと積極的に面会して自分の能力を認めてもらい、将来の就職の手づるにする意図もあったようです。李白も二十五歳にして、初めて故郷の蜀を出て諸国遍歴の旅をスタートします。この「峨眉山月の歌」は旅に出て最初の詩です。

「峨眉山」は蜀の南方に位置する山です。その東の楽山という街に船着き場「清溪」があり、李白はここから舟で長江を下り三峡へ向かうときにこの詩を詠みました。「平羌江」は四川省を流れる川。「三峡」は長江上流の瞿塘峡、巫峡、西陵峡を指します。そして「渝州」は現在の四川省の重慶です。七言絶句という短い詩型の中に「峨眉山」「平羌江」「清溪」「三峡」「渝州」と五つの場所地名を用いながらも、少しの違和感を感じさせないばかりか、かえって字面の効果を巧みに生かして、どんどん先へ進む船出の雰囲気を高めています。また舟旅の途中で詠んだ詩だけに「流」「發」「向」「下」などの動詞を多用していることにより動感があります。

第三句の「三峡」は舟の難所として有名なことから、実社会に乗り出す李白の前途への不安を示す象徴ともいえます。また第四句の「君」は表面では最初に出てくる峨眉山にかかる月を指しますが、「峨眉山」と半輪の月が共に女性の眉を連想させ、期待と不安の中で故郷にいる意中の女友だちに会いたい気持ちを暗示しているかのようです。

七言絶句という短い詩型の中に情報をたくさん盛り込み、さらに様々なことを連想させます。二十代ですで大詩人李白の風格をみせている詩です。

参考文献：中国詩人選集李白上（岩波書店）・漢詩の辞典（天修館書店）・李白巨大なる野放図（平凡社）

是暁光を知らず  
是残夜の色を抑む  
但覚ゆ一片の清  
新涼肌骨に徹す

不知是暁光抑是残夜色但  
覺一片清新涼徹肌骨

《大意》朝かと思つて起きたが、まだ夜は明けていない。ただ何か清々しさを感じるのは、初秋の涼しさが肌にしみるからだろうか。(趙翼詩・夜起)

花影一庭の月  
虫聲四壁の秋

花影一庭月  
虫聲四壁秋

《大意》花の影は庭一面の月にうつし出され、鳴く虫の声は家の四方にひびく秋となった。(李原)

花影一庭月  
虫聲四壁秋



読み  
明月夜光浮かぶ  
(夜光の珠のような明月が夜空に浮かぶ。  
(寒山詩))

明  
月  
夜  
光  
浮

佐藤象雲書

光

下部を広げ安定した形。

偏旁の幅はほぼ同じ。偏旁の上辺を揃える。

横画は長すぎないように。

明月

左右の縦画をやや背勢にしてバランスをとる

第八画右払いの起点が下がらないように

浮

下らないように

湾曲の度合いに注意

ねかす

旁の中心

夜

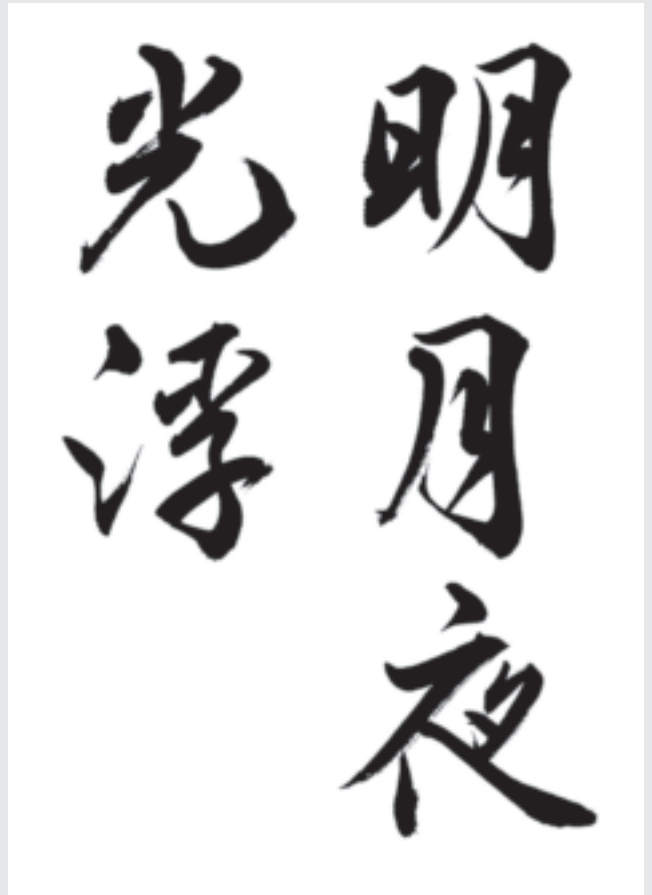


- ・一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
- ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
- ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

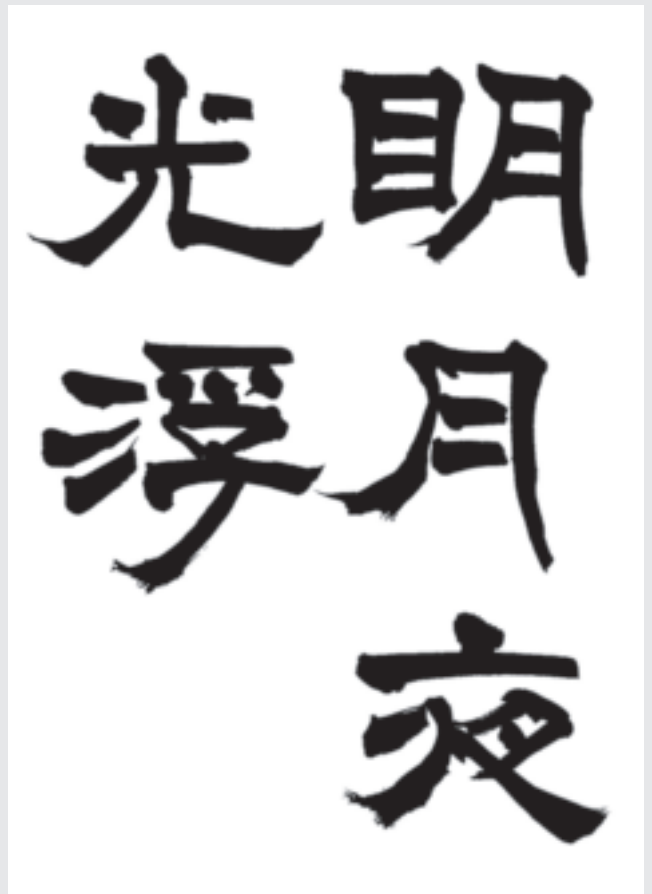
行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。



次号課題

隸書



◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部	順 位	氏 名
石がけに子ども七人こかけ		
ふぐをうけり夕焼け小焼け		

北原 白秋

和泉 溪石 先生書

徳建名立形端正  
徳建名立形端正  
徳建名立形端正

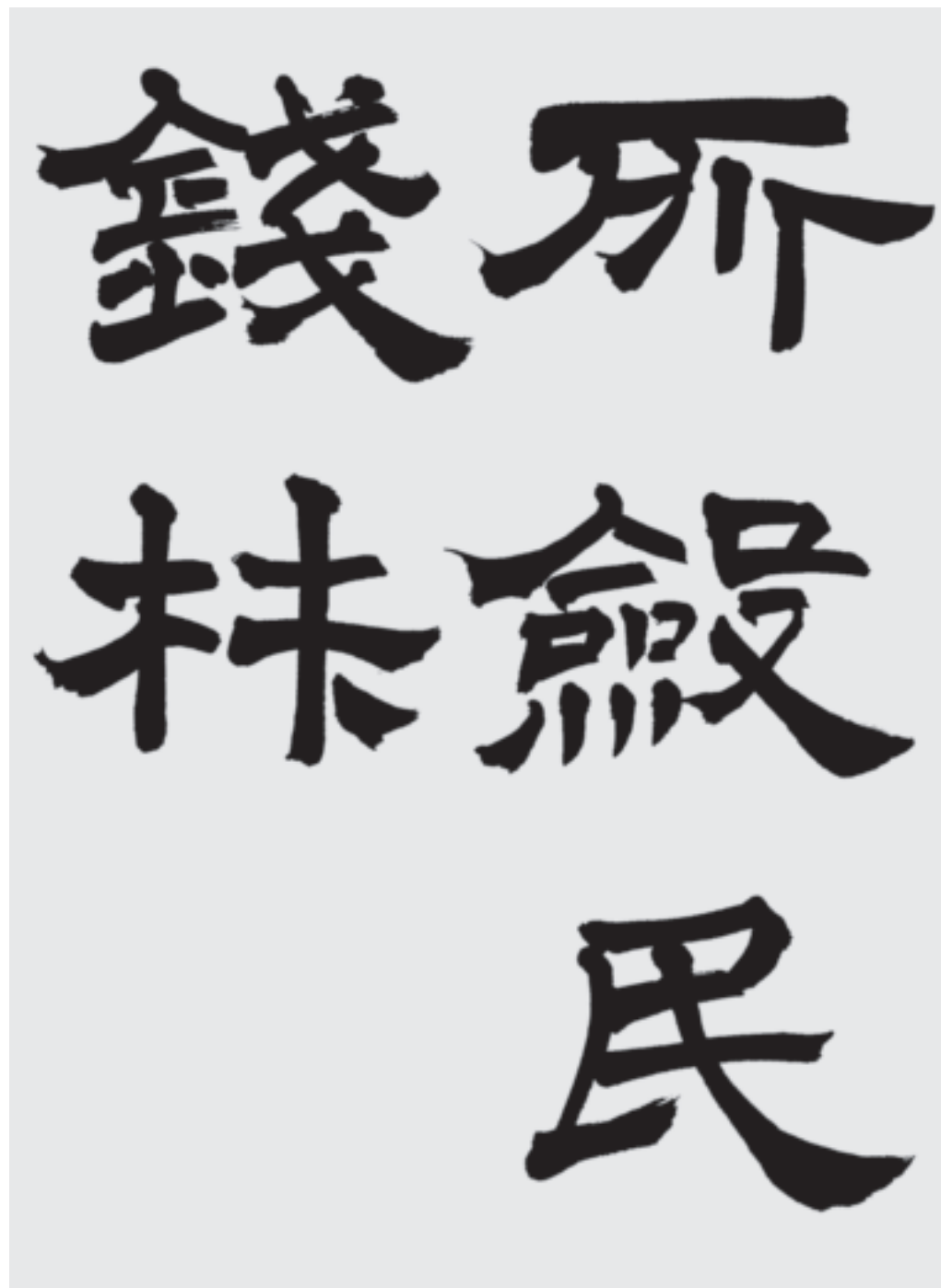
佐藤 象雲 書

音

トクケンメイリツ  
ケイタンヒヨウセイ

略解

徳をみがき名をあらわす  
心が端正であれば表にも正しく映る



斂<sup>れん</sup>する所の民の錢材<sup>せんざい</sup>を(還<sup>かえ</sup>さしむ)……

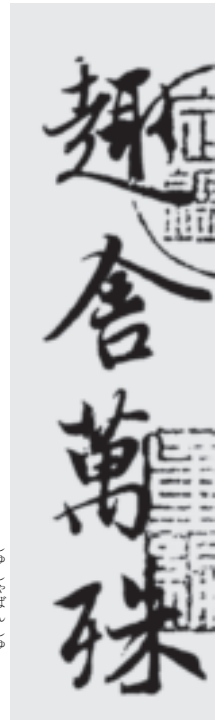
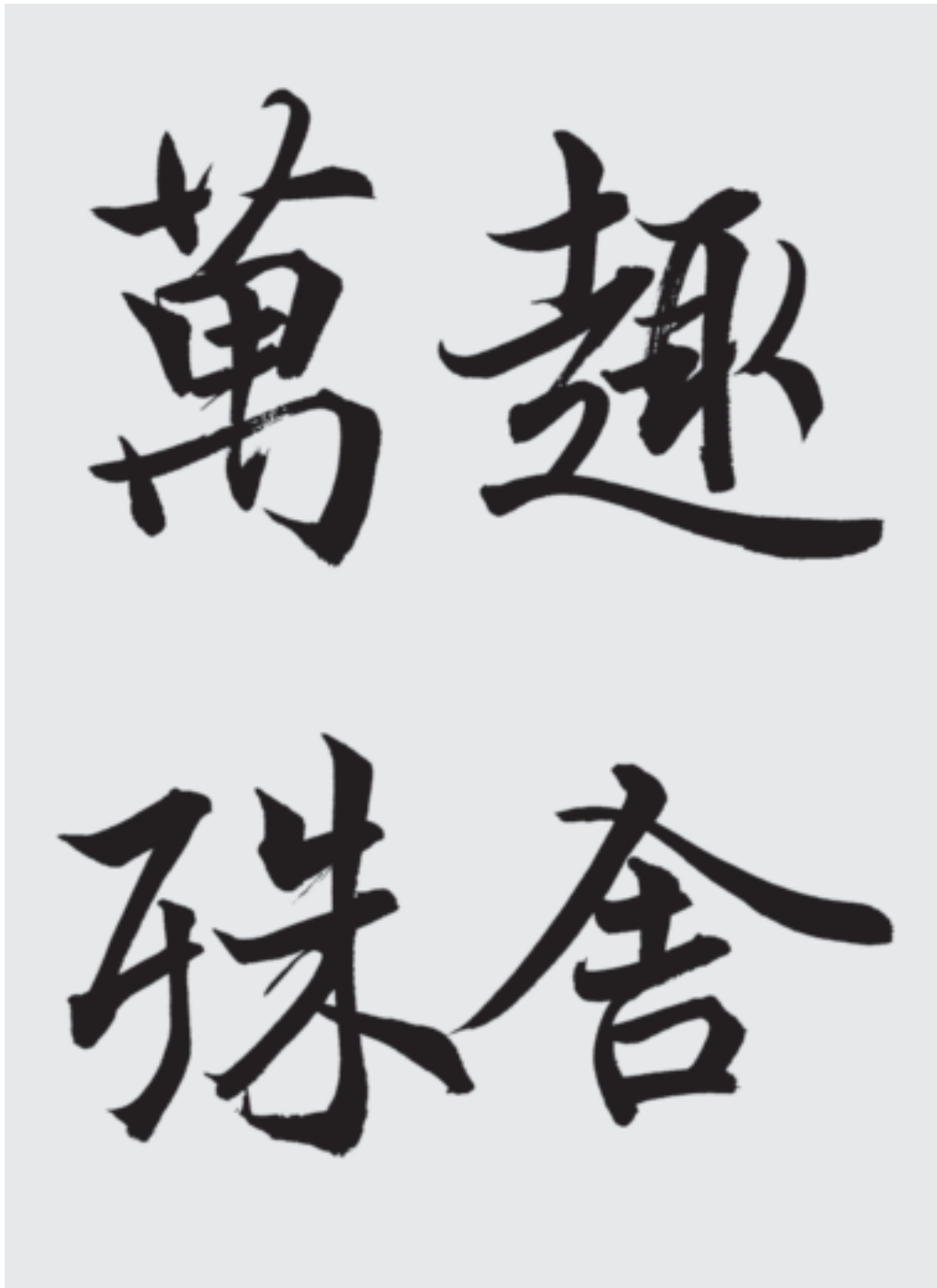
■史<sup>し</sup>晨<sup>しん</sup>後<sup>こう</sup>碑<sup>ひ</sup> (後漢・西曆一六九年)の臨書 (19)

象雲臨

『所斂民錢材』

漢隸は一般的に篆書の風格を残す古隸と、この史晨碑のような波磔をもつ八分隸に分けられます。さらに百数十年の幅をもつ漢隸をその書風によって分類されることがあります。清初の金石学者、朱彝尊は「方整」「流麗」「奇石」の三つに分類し、同じく王澐は「方整」「清瘦」「古雅」に分けています。根本的に同じ分類で、「方整」は構築性が高く字粒が方形で、線が肉太なものです。本碑や「張遷碑」「白石君碑」が該当します。「流麗」「清瘦」は波磔の美しさが特徴の八分隸で「札記碑」「曹全碑」が典型的です。最後の「奇石」「古雅」は様式化されていない情趣と味わいに富む碑群で「開通褒斜道刻石」や「楊淮表紀」などの磨崖碑や木簡風の「萊子侯刻石」などが挙げられます。





趣舍萬殊にして  
しゆしばんしゆ

象雲臨

■王羲之・蘭亭序（東晋・西曆三五三年）の臨書（21）

『趣舍萬殊』

この趣舍萬殊という言葉は非常に解釈が難しいと思います。「趣舍」は取捨とほぼ同義で、進むことと止まること、或いは取ること捨てることという意味です。「萬殊」はいろいろな異なっていることです。二語あわせて、人々の行為は千差万別異なっている。という意味合いになるようです。

さて今回のこの四字も、いわゆる綺麗に整った字形ではなく、歪みもあって一見バランスが悪く感じます。一方で臨書してみるとこの風趣を捉えるのは難しく、書美とは何なのか？晋人の尊ぶ風韻とは如何様なものなのか。捉えどころがない王羲之の書の大きさ難しさを痛感します。